

## 研究者と読者のあいだ

さきもと たけ はる  
笹 本 武 治

さきごろ時間的余裕ができたのを機会に、久しく「積んどく」まま放置してあった本のかずかずを取り出して、低開発国の経済開発関係書を中心に乱読に耽っていて、今さらながら感じさせられることが多い。

本を読むとき、誰も多くの期待に胸ふくらむ思いであろう。いまの私にとっては、低開発国経済に関する知的蓄積を豊かにし、理解を深め、頭の整理に役立たせ、自己啓発の糧にすることへの期待が大きい。こうした期待が多かれ少なかれ満たされたとき、疲労感は充実感で払拭されてしまう。ところが、いいようのない不満、空しさ、モヤモヤした不快感で疲労が倍加する場合もまれではない。期待が大きすぎるからでもあろうか。端的に言って、研究者である著作者はいったい何を意図し、何を解明するために、そして誰のために研究し、その成果を公けにしたのか、過去の研究水準にこれで何がプラスされたのか、を疑わざるを得ない本も決して少なくない。また総論があって各論がなかったり、あるいはその逆であったり、事実の羅列で体系がなかったり、あるいはまた古典的理論で低開発国の現実を教条的に「分析」したり、低開発国の社会経済を一義的に膠着的な停滞性として把えることに終始したり、等々不満の原因の挙証にはこと欠かない。

研究者の著作が、研究者と出版社との力学的関係で行なわれるといった世俗的な状況が存在することも事実である。しかしこれは研究の契機なり成果発表の経緯の問題であって、研究そのものとはほんらい無縁のはずである。研究者は一定の問題意識をもち、研究対象を特定し、既存の研究業績の水準を抜く成果をあげるべく野心的に研究に従事するはずである。ところが少なくとも結果的にみて、そうした形跡を疑わせる場合も少なくないのである。

研究が「ある事実を明らかにするために調べ、考え、真理を究める」ことだとすれば、その成果を公けにすることは必ずしも研究そのものの絶対的な必要条件とはいえないかも知れない。だがその成果の発表が研究のあかしであり、研究者の社会的任務だとすれば、最終的にはなんらかのかたちで発表することが期待されるであ

ろう。たしかに社会科学の領域では、この input と output の関係は、自然科学のそれのように、すべて即物的だとはいえないし、両者の因果関係は通常必ずしも明確ではない。といって成果の発表を伴わない研究がほんものだとはいえない。そして、この成果発表によってはじめて、研究者の知的労働は社会的労働としての市民権を得ることができよう。

ところで、研究者にとって、研究成果を世に問うということはいったい何を意味するであろうか。それが研究のあかしであり、ひとつのモニュメントであることは明らかである。さらにその成果が読者の評価をうけ、社会的に共有され、なんらかの意味で社会的に寄与することが期待されることも当然であろう。このことは、研究がその成果の受け手である読者との対応関係に大きくかかわっていることを意味するであろう。そしてその成果に対する読者の対応の仕方は多様であるとしても、それからなにがしかの収穫を期待している点では共通である。ここでは読者が研究者である専門家であろうと、主題に関心をもつ周辺の人たちであろうと問わない。またその研究が理論分析であろうと実証分析であろうと問題ではない。要は客観的にみて、研究成果が理論的水準・構成において適切であるかどうか、また現に激しく動いている低開発国の発展と停滞の構造の実証的解明において前進的であるかどうか、さらに読者の問題関心を高め、理解を深め、啓発を刺激し、あるいは「反面教師」の役割を果たし得るかどうかである。

こうした社会的評価をうけるためには、いうまでもなく、研究の成果がまず読者の注目を惹き、読まれることが必要である。ときにシニカルにいわれるような「執筆者本人にしか読まれない」研究成果は、単なる研究者の個人的なモニュメントとして埋没してしまい、社会的生産として評価されえない。そのような読者不在の研究は、調査し、考察し、真理を探究する、といった研究そのものの目的にただひたすら忠実であれば良しとして読者を無視し、読者を意識することはむしろ研究の墮落だとする「高踏」的な研究態度に由来するのかもしれない。この意味で研究者の姿勢が問われるべき研究が少なくない印象を拭い去ることはできない。

(アジア経済研究所 講師)